

## 令和7年度 第2回小国町振興審議会 会議録

- 日 時 令和7年10月15日（水）15：00～16：40
- 場 所 小国町役場 4階 大会議室
- 出 席 者 高橋和衛会長、渡邊重信委員、伊藤優子委員、山口 満委員  
佐藤靖彦委員、井上正美委員、舟山孝夫委員、木村 恵委員、  
渡邊 剛委員、笠井修一委員、大澤雅人委員、吉田悠斗委員、  
舟山康名委員、佐藤 茜委員  
加藤孝則氏（岡島博之委員代理）、岡司直也委員（オンライン出席）  
副町長、事務局（4名）
- 内 容
- 第1号 第6次小国町総合計画基本構想（素案）について  
人口ビジョン（原案）及び第6次総合計画基本構想（素案）について事務局から説明した。

各委員からの質問、意見は以下のとおり。

（大澤雅人 委員）

母の年齢別出生率に関して、小国町では若い人の出生率が高いということであったが、早めにお母さんになりたい、早く家庭を持って子どもを産みたい人が小国に残っているということではないのか。町外に出た人は、町外でやりたいことがあり、キャリアを目指すため結婚や出産はむしろ後でよいという考えなのではないか。小国で生まれた人全体を母数にすると、また違う見方になるのではないか。

（遠藤主査）

町外に出た方の出生に関するデータがないため、比較できない。町内の子育て世代へのアンケート結果からもその点について読み取ることはできず、今回はそこまでの確認はむずかしい。

（政策企画監）

全国的な傾向との比較であり、全国のデータには都市部もあれば地方も含まれるため、全体の傾向に比べて、小国では若い世代の出生率が高いという点を特徴として捉えた。

ご指摘の部分も想定されることかもしれないが、町外に出た方までの詳細な分析は難しいということで、ご理解いただきたい。

(舟山康名 委員)

令和7年に生まれてくる赤ちゃんが10人の見込みということについて、漠然とした不安がある。子どもの学年の人数が10人以下になる可能性が増えていくということで、自分が育ったような環境ではない中で子どもが育っていくことに不安を感じる。

そういった子育て世代の不安を解消するような働きかけは考えているのか。保育料の完全無償化は助かっている世代が多い。これまで3人目からだったが、周囲には30代以上で第2子を産んで、3人までは厳しいという人も多い。また、新たな子どもの遊び場に関しては非常に興味を持った。特に冬場の遊び場については子育て世代からの要望があったと思うが、家族での移住に対してもアピールポイントになると思う。

(政策企画監)

令和7年の出生数が激減した点について、少子化対策をあらためて整理する必要があると認識している。子育て支援が中心にはなるが、基本構想の中では多面的な施策展開を図ることとし、意欲的な取り組みと表現した。具体的な取り組みは、今後の基本計画等で定めていく。

新たな遊び場については、内部で協議しながら具体化していきたい。

(佐藤 茜 委員)

中高生が町に愛着があるということは嬉しく思ったが、その世代は町を出たことがない。大学生など、町を出た世代はマイナス面も見えていると思うので、そういった世代に今後どうしたら町に帰ってきたくなるか聞いてみるとよいのではないか。成人式でアンケートを取るとか、小国で育った人の声を聴く機会があるとよい。

新たな遊び場について、子どもが減っている中でそこに予算をかけるのは難しいのではないか。各地域に今もある、公園や保育園の遊具を普段から安全に遊べるように整えるだけでも遊び場は確保できるのではないか。

(政策企画監)

別冊の資料に取りまとめているが、今回成人式に出席したかたにヒアリングを実施した。全員というわけにはいかなかったが、学生も社会人もいて、それぞれ課題があると認識した。今後も、意見を聞く機会を作りたい。

今ある公園については、利用できる環境を整えていく必要があると認識している。

(吉田悠斗委員)

アンケートについて、同じ人に3年後5年後など継続的に意見を聞くことも検討されたい。愛着を持っているかという漠然とした質問でなく、どこに愛着を

感じるのか、どういったことに誇りを感じるかなど、具体的な形で長い期間アンケートを取るのがいいのではないか。

(政策企画監)

そういう視点は持っていないかった。同じ人に聞くことで、どういう変化があるのか等を捉える意味では有効な手段と思う。今後検討したい。

(渡邊 剛 委員)

今後、この基本構想をもとに基本計画を立案していくことになるかと思うが、インフラの維持管理については非常に危機的な状況が続いている。立地適正化計画などをきちんと構築して居住誘導区域を設定し、交付金をうまく活用することで財政的な負担も少なくなることと思う。そういうことも視野に入れて、計画立案を進め、よりよい社会基盤の整備を進めてほしい。

(政策企画監)

立地適正化計画については別の担当部署で来年度までに策定することとしている。基本構想の中でも、都市機能の適正な配置を図ることとしており、社会基盤の維持管理は非常に重要な位置づけと認識している。

(加藤孝則 氏)

会社の事業を維持するには採用が非常に大切であるが、かなり厳しい状況にある。採用にも色々なパターンがあり、派遣社員もいる。派遣社員には車がない人もおり、暮らしという面でスーパーや100円ショップがなくなった影響は大きい。関西などあらゆる地域から募集しているが、小国町で面接をしたところ、暮らしていくイメージができないということで、実際に断られたことも何件かあった。民間の問題という面もあると思うが、安心して生活できるようになれば、移住定住にも繋がってくると思う。

(政策企画監)

暮らしを守る、という視点は今回新たに取り入れたものであるが、町外から一時的にいらっしゃる方、外国人の方などの視点も大事にしたいと考えている。

特に中核企業にはたくさんいらっしゃるため、情報を共有する場面の設定等、支援を充実させていく取り組みも検討したい。

(渡邊重信 委員)

小国に足りないと思う点であるが、町民が計画に出てこない。行政と民間の間に大きな格差があると、日頃から感じている。人口が減っている中で人をどう呼び戻すかを考えたとき、町の歴史文化も重要だが、お祭り一つをとっても同じ人が関わっていて特徴がない、という課題がある。町民が培ってきたことを伸ばす

ようなところが非常に少ない。各地域のお祭りを町民がカバーしあいながら実施しているが、そういったことへの行政の理解が乏しい。

デジタル化の推進とは業務の効率化だと思うので、効率化できた分を町民としっかり向き合い対話する時間にしてほしい。町民は、まちづくりというより自分の生活をどう豊かにするかという視点になる。みんなでわくわくするには、みんなの意見を聞き、どう対応していくか、そして行政と民間の格差をなくしていくか、そこがキーポイントになると思う。

プランを作っているだけで、実際に行っていないというのが大きな課題。計画策定の前に、一つずつ成功を積み重ねていく気合、町民が相談しやすいまちづくりを進めるべきである。

(政策企画監)

町民と行政がどのように一緒に取り組めるのか、地域も多様な形になっており難しい課題と捉えている。人口減少の中で、地域の皆さんと行政がどのように協働できるかという視点は、大変重要な位置づけになるものと思っている。暮らしを支えるという意味でも、こうした視点を持って取り組んでいきたい。

(佐藤 茜 委員)

地域行事という点では、行政が関わることでやりづらくなる行事もあるのではないか。地域の中には何年ものつながりがあり、町には金銭面や広告面でのみサポートしてほしいというところもあると思う。一方、「睦」は行政が関わったことでお祭りが復活しており、地域によってサポートの仕方が違うように思う。

先ほどの格差について、このたびデジタルコンテンツ制作に関わっているが、町では町外から人を呼び込む取り組みを何年も続けていて、実際に年に何回も町に足を運ぶ人たちがいる。そういう方たちは、小国愛も非常に強い。町の外に発信すること、白い森のプランディングについて、コツコツやってきたことが身になっている。その中で、小国町独自のお土産が少ない、買えないという話が出た。行政であれば、企業への声かけや、町民を巻き込んで、何か取り組むこともできるのではないか。

自分も、小国の町民はまちづくりに興味がないと感じているが、実際に小国のファンがいることは知ってほしい。渡邊委員が言うとおり、相談できる窓口があれば、町民も関わりやすいと思う。

(政策企画監)

地域によって考え方もそれぞれであり、我々としては丁寧に話を聞きながら、具体的な取り組みを進めていきたい。

(井上正美 委員)

高齢の転出者が多い点について、住みにくいからではないかと考えている。自分は新潟県に長くいたが、新潟県は道路が整備されており、踏切の整備も進んでいる。山形県は道路整備が遅れており、小国町では災害もあったため、先祖代々の田畠に行けないところもある。道路がボコボコでは魅力がないように思う。

もう一点、総合センターの建て替えについて、当初は3月頃の完成予定だったと思うが、遅れていると聞いた。9月上旬に開催される県の芸術祭を小国町でという話もあるようだが、どうなっているのか。

(政策企画監)

道路についてはご指摘のとおりかと思う。重要な視点であり、着実に整備を進めたい。国道や県道については、これまで同様に国県への要望を行っていきたい。

センターについては来年の3月までの工期で進めているが、受注者と調整をしながらあらためて見通しが示せるものと思う。芸術祭については把握していなかったため、確認したい。

(舟山孝夫 委員)

多様な地域活動を支える仕組みの構築と新たな地域社会のデザインという点について、大きな期待をしている。少子化によって地域の学校がなくなり、つながりが非常に希薄になっている。小国町の特徴ある地域デザイン、継続して地域に住んでいる人が満足できる、地についたデザインにすべき。移住定住に選ばれるには、そこに住んでいる人がいいなと思わなければならない。この方向性を大切にしてほしい。

(政策企画監)

地域の特徴や考え方を大事にしながら、今後の計画で整理していきたい。

(木村 恵 委員)

人口減少化における民間保育、教育施設の役割は、地域の教育と福祉のインフラという面があり、その重要性は高まっていると感じる。行政計画の中で、民間施設を単なる委託先として捉えるのではなく、地域の子育て・教育の拠点として明確に位置づけていただきたい。

行政と民間の壁を感じることも多々あるため、定期的な意見交換を行う場の設定や、民間の職員も一緒に参加できる研修、人材確保に関する情報共有などもできるとよい。現在、保育施設で行っている地域行事や子育て講座も、社会教育の活動として支援できることもあるのではないか。民間施設が地域の教育や福祉の拠点として持続的に機能し、地域全体の子育て力に繋がっていくとよいと考える。

また具体的な要望として、4歳児健診の導入を検討いただきたい。小国町では3歳児健診まで実施しているが、4歳児の時点で発達や健康に関する課題を把握する機会が少ない。健康福祉課に相談窓口はあるものの、保護者が相談しやすいのは身近な保育士であり一番の窓口になっている。しかし、保育園から行政へ情報共有しても、個人情報の観点もあって介入できないという隔たりも生まれている。3歳児健診と就学時健診の間に4歳児健診を行うことで、切れ目のない子育て支援ができるものと考える。

(政策企画監)

民間保育園の機能については、支援の体制なども含め整理する必要があると考えている。4歳児健診については、今後具体的に議論していきたい。

(伊藤優子 委員)

今回の視点2について、長く住んでいても気づかないことがたくさんあるのだと感じた。そういうよその考え方を持つ人と、もともとの住民の交流の場を作っていくことで、より豊かな考え方が提案されるのではないかと思う。線を引くのではなく、語り合えるような形になるとよい。

学校訪問などで子ども達の様子を見ていると、地域を支える人財としてずっと小国に住んでほしいと思う半面、その子の夢を育むには外に出ることも理解できる。小国高校の留学生には頼もしさを感じており、日本を支えるという大きな視点で見れば、小国町として良い教育ができているとも感じる。

小国町で住んでいくには、健康で長生きし、命を大事にしなければならない。そのためには、食料品が必要であり、医療も重要である。高齢者について、いよいよという段階で子どものところに転出されるケースが多いことから、保健医療福祉のこれまで以上の充実が求められる。自分を律して自立した生活を送ることが何より重要であるが、そこを町で支えていくという考え方が必要に思う。

(政策企画監)

ご指摘のとおり、視点2は新たな考え方である。取り組みを明確にするために計画としてはわけて整理しているが、実際には両方の面を見ながら進めていきたい。

自立という考え方も非常に大事な部分であり、町民に理解をいただきながら、まちづくりに取り組んでいきたい。

(団司直也 委員)

基本構想の内容について、アクションベースでの議論、次に踏み出すべしというご意見が多かったと思う。冒頭で生まれてくる子どもの数が少なくなっていることへの衝撃の声があったが、小国に限ったことでなく過疎自治体では同じ

状況に入っている。少子高齢化というより、少子社会でどう回していくのかという局面に来ている。ただし小国の場合には社人研の上振れからもわかるとおり、これまでの様々な外とのつながり、関わり、ネットワークができていること、企業が働く場を作っていることの影響は大きく、協働ということが非常に大事なポイントになってくると思う。

外国人や短期雇用者が小国を働く場所として選ぶということも大きな要素である。買物難民というと高齢者の話に終始しがちであるが、現役の労働者の問題でもある。スーパーの撤退に関する話があったが、経営の仕方やサイズ感を工夫して、マルチワークを活用するなどニーズに合わせてフレキシブルに考えると、買物の需要があることはチャンスでもある。お土産についても、発想を加えるなどしてチャンスを作っていくことが重要。

地域デザインについては、外の動きを学ぶ場の設定や、学んだことを小さくチャレンジできるような仕組み、それを応援できるような場づくりが必要。それを行行政だけがするのは難しいため、一部を中間支援の組織や団体が担うなどすると、本日の議論の内容が一歩踏み出しやすくなるのではないか。

(高橋 和衛 会長)

第5章にこれからの中を描くということで、「白い森の約束～ともに描く未来～」とあり、大変いい題名であると思う。平成5年頃から町を白い森と表現しており、その白とは雪のイメージ、ブナの木肌のイメージとよく言われる。しかしそれにプラスして一番大事なのが、この大きな町土をキャンバスに見立てて、理想の町を描いていこうという3つ目の意味である。そのような文言も構想に入れていただきたい。